

8. レポート送付後のフォローアップ

アセスメントは、指導とつながってこそ意味があります。ここでは、アセスメント・レポート送付後のフォローアップについて、記載します。学校の希望も聞きながら、コーディネーターやアセスメント実施者が無理のない形で学校現場をフォローしていくことで、よりよい指導につなげることができるでしょう。

(1) フォローアップ会議

1 授業時間程度で、Web 会議を開き、フォローアップのための情報交換を行います。レポートの見方を説明するとともに、指導のための「目標」を設定し、そのための具体的な指導の工夫などを話し合います。

進め方は、次の通りです。

- ①学校の先生方や保護者が、アセスメント・レポートをどう受け取ったか、率直な感想や反応を聞きましょう。
- ②アセスメント実施者は、アセスメント・レポートの見方を説明しましょう。特に、「ことばの力のものさし」の考え方を丁寧に解説し、「包括的なことばの発達ステージ」と「日本語の習得ステップ」のマトリックス図の上での子どもの「現在の力」と、「年齢相応の目安」を皆で確認しましょう。必要に応じて、アセスメント・レポートや、『ここがポイント！ 文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」パッとわかるまるわかりガイド』を画面共有するなどの工夫をしてもよいでしょう。
- ③〈書く〉については、『改訂版 DLA』には含まれていません。学校の先生方の日常の観察での見取りを聞きながら、『実践ガイド』「第3章 3.4 ことばの力のものさし〈書く〉」(p.23～26) 及び「第6章 作文指導の中での書く力の評価」(p.186～199) を参考にして、〈書く〉の「現在の力」のステップを検討します。この際、〈書く〉の「包括的なことばの発達ステージ」と「日本語の習得ステップ」の表を画面共有してもよいでしょう。相談の上で、〈書く〉の「現在の力」のステップをアセスメント・レポートのマトリックス図に記入しましょう。
- ④その上で、『実践ガイド』の「第4章 『ことばの力のものさし』を活用した評価から指導・支援へ」(p.34～42) を参照して、学校の先生方とコーディネーター及びアセスメント実施者で、3 か月あるいは半年後の指導上の「目標」を設定します。

- ⑤斜め方向の支援が必要なのか、縦方向の支援が必要なのかを判断した上で、「目標」に向けて、学校でどのような指導が有効か、具体的に相談しましょう。取り出しをしている場合には、取り出しで取り組む内容だけでなく、取り出しでの学習内容を在籍学級での学習参加につなげる方法や、在籍学級での配慮などについても検討するとよいでしょう。また、『実践ガイド』の「第5章 実践記録集」(p.44～183)等から、参考になる事例を紹介することもできます。基本的な姿勢として、母語も含むすべてのことばの力を活かすトランスランゲージング教育の視点で取り組んでいくことの重要性を伝え、そのためにできることについても助言しましょう。その際、適切なICTツール活用も促すとよいでしょう(p.42 Column 参照)。
- ⑥家庭での母語の使用も含め、多文化多言語で育つことを肯定的に受け止める重要性について伝え、学校として多文化共生の教育にどのように取り組めるか、検討しましょう。

斜め方向の支援が必要な事例（滞日期间7年の小学3年生）

ステップ	ステージ	ステージA 【イマココ】期	ステージB 【イマココから順序】期	ステージC 【順序】期	ステージD 【因果】期	ステージE 【抽象】期	ステージF 【評価・発展】期
8	書く 読む 聞く・話す						
7	書く 読む 聞く・話す						
6	書く 読む 聞く・話す				年齢枠 の目安		
5	書く 読む 聞く・話す						
4	書く 読む 聞く・話す			目標			
3	書く 読む 聞く・話す		現在の力				
2	書く 読む 聞く・話す						
1	書く 読む 聞く・話す						

縦方向の支援が必要な事例（滞日期间4カ月の中学2年生）

ステップ	ステージ	ステージA 【イマココ】期	ステージB 【イマココから順序】期	ステージC 【順序】期	ステージD 【因果】期	ステージE 【抽象】期	ステージF 【評価・発展】期
8	書く 読む 聞く・話す						
7	書く 読む 聞く・話す					年齢枠 の目安	
6	書く 読む 聞く・話す						
5	書く 読む 聞く・話す						
4	書く 読む 聞く・話す					目標	
3	書く 読む 聞く・話す					現在の力	
2	書く 読む 聞く・話す					目標	
1	書く 読む 聞く・話す					現在の力	

(2) フォローアップのための相談対応

子どものことばの力は、一朝一夕に伸びるものではありません。息の長い取り組みが必要です。コーディネーターは、今後のアセスメント実施や、指導に関わる相談について対応可能な内容を伝えましょう。常設の相談窓口がある場合には連絡先を伝えることも大切です。

アセスメント実施者は、単発のアセスメント実施で終わることなく、教育委員会ともできるだけ連携しながら、多文化多言語の子どもたちと、子どもたちが学ぶ学校を支えていきましょう。



オンライン、ここがポイント！！

新たに開発された「ことばの力のものさし」は、「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ」と、「日本語固有の知識・技能の習得ステップ」の2つの側面から子どものことばの力を捉えるという点で、これまでにない視点を学校現場にもたらすものとなっています。

この新たな視点に立って、子どもの「現在の力」を捉え、「目安」を意識しながら、適切に指導の「目標」を設定し、具体的な指導のあり方を検討する必要があります。しかし、これまで受け入れ経験をもたない学校などの場合、このプロセスを学校の先生方だけで進めるのは難しい場合もあります。

オンライン・アセスメントの場合、その部分を支えるのが、フォローアップ会議やフォローアップのための相談対応です。オンライン・アセスメントを適切な学習指導につなげていくためには、こうした機会が極めて重要だといえるでしょう。コーディネーター及びアセスメント実施者は、「ことばの力のものさし」の『実践ガイド』を読み込み、アセスメントの専門家・熟達者であるだけでなく、アセスメントに基づく指導についてのよき助言者となれるようにしましょう。

なお、ここではフォローアップについて、フォローアップ会議と相談対応を挙げましたが、他にもさまざまなフォローの方法が考えられます。地域や学校の実情に合わせて、工夫してみてください。

トランスランゲージング教育とは、子どものもつすべての言語資源を最大限活かす教育の在り方を指します。そこでは教育者は、バイリンガル・マルチリンガルの子どもたちが持つ言語資源すべてを価値あるものとして認め尊重するスタンスに立って、子どもの言語パフォーマンスを観察し、子どものことばの力を最大限伸ばす適切なタスクを設定して授業をデザインしていきます。オンライン・アセスメントのフォローアップにおいても、アセスメントで見取った子どものことばの力に応じて、トランスランゲージング教育の視点を取り入れた指導の在り方を検討していきましょう。

教科学習において、すべてを日本語だけで学ぶ必要はありません。母語のリテラシーが高い子どもであれば、インターネット上で翻訳機能を活用するなどして、母語を使って教科内容を理解することもできます。その前提には、検索のために漢字の音がわかる必要がありますが、障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進等に関する法律（以下、教科書バリアフリー法）の一部改正（2024）により、教科書の内容の読み上げや漢字のルビ振り等の機能を持つ音声教材を、日本語指導が必要な子どもにも提供できるようになりました。学校は、その子どもに合ったデジタル環境を整えて、サポートするとよいでしょう。

例えば、①単元の核となる概念や用語をルビ付で表示する、②ルビを手掛かりに検索・翻訳して母語にする、③その意味内容を検索して母語教材で理解する、④それを母語で要約してみる、⑤それを日本語に翻訳し直す、⑥日本語の要約を教員に確認して修正してもらうなどして、教科内容と日本語の両方を身に付けていく、⑦周囲の生徒にも、母語ではこのように説明できると伝える、などの活動もできるでしょう。

※改正教科書バリアフリー法については、下のホームページを参照してください。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/1339531_00003.htm

